

## トルコとシリア

首藤 静夫

先般のトルコ・シリア大地震ではすでに五万人を超す死者が発生、不明者・負傷者の数は把握できないという。大惨事のさなかにある。

普段は縁の薄い国々だが、たまたま宮崎市定の『アジア史概説』が手許にあるので両国の歴史の一端に触れてみた。

先ずトルコだが、小アジアから中央アジアあたりが彼らの故地だろうと思っていた。ところが元々は蒙古高原だという。突厥という名で中国史に登場するのが始まりで建国は五五二年、それでトルコは今もこの年を建国の年に行っているそうだ。

北方の遊牧民は興るのも亡びるのも速い。北アジアを広く股にかけたこの国はその後東西に分裂、いずれも唐帝国に討滅され歴史から消えた。ところが、これに連なる遊牧民は永らえて、別の土地・名前で歴史に何度も顔を出す。有名な名前だけでもウイグル、ペチエネグ、カラハン朝、セルジューク朝、ホラズム・シャー朝、マムルク朝、オスマン朝、そしてトルコ共和国などなど。面白いことに時代が下る都度西へ、南へと移動した。その結果が最初に僕の抱いたトルコの領土概念となったようだ。西に向かった理由はインド、西アジア、エジプト、欧州をつなぐ富に魅せられて、と故宮崎教授は述べている。

地中海の東岸がシリアである。この国は地震の前から政治的宗教的軋轢により内戦状態である。あれやこれやで今は見る影もないが、絶好の交易地として古代から栄え、アジアと欧州のせめぎ合いの場だったという。ローマ、東ローマに長く支配され、十字軍にも蹂躪された。ようやくオスマン朝によりアジアに引き戻されて（良かった）と教授は述べるが、今またロシアに狙われている。

極東の島国に居て、僕は領土を固有のものと考えたくなるが、長い歴史のローマで捉えるべきなのであろうか。それはともかく、人類学の一説では、日本人の最初の祖先はシリア辺りで長い時間を過ごし、豊かな感性を養ったとされる。広いアジアもどこかで繋がっているようだ。